

## 第7章

# ロズウェル事件：すべては ここから始まった

### 7.1 ビル・クーパーの衝撃的な UFO・宇宙人 暴露講演

その昔、ニコラ・テスラの置き土産と言っても良い事が起こった。  
ロズウェル事件というのを知っているだろうか？

1947年に起こった、あのロズウェル事件だ。アメリカの  
ニューメキシコ州のロズウェルに UFO が墜落したのだ。この時  
期、実際には世界中で計26基の UFO が撃墜ないしは墜落した。  
おそらくこのことは余り知られていない。

では、元米軍情報兵だったビル・クーパーという人をご存知だろ  
うか？

ビル・クーパーはだいぶ前の1989年に、ある奇妙な講演を  
行った。この名は彼のニックネーム (通名) で正式にはウィリアム・



図 7.1 ウィリアム・ミルトン・クーパー。  
1943 年 - 2001 年 11 月 5 日。  
<https://www.youtube.com/watch?v=1PZw4AxpDMc>

ミルトン・クーパー (Milton William Cooper) といった。その講演は、おそらくアメリカ初の UFO・宇宙人暴露講演だった (きっと世界初だったかも知れないが)。彼は、自分が何らかの理由で死んだ場合、その原稿\*<sup>1</sup>を公開するように仲間たちに送っていた。それが彼の遺言だった。そして、インターネット時代にそれが公開された。その時の講演は YouTube 時代になって公開されたようだ。

2001年9月11日。「ニューヨークの同時多発テロ」が起こった。この日を境に世界が変わった。実は、クーパーはそのずっと前にその可能性を自分の持つ地方ラジオ放送で指摘し続けた。ところが、ある日、犯罪をデッチあげられ、冤罪による不当逮捕され

---

\*<sup>1</sup> William Milton Cooper, "HISTORY OF CIA COVERT OPERATIONS: The Secret Government", 1989.

そうになった。彼は元軍人として自分の正当性を主張し、警察と銃撃戦になった。そして、彼は多勢に無勢で射殺されたのだ。だから、彼の死はこの暴露講演のせいではないかと言われた。

では、スティーブン・グリア医師をご存知だろうか？



図 7.2 スティーブン・グリア博士。1955 年 6 月 28 日 - 。  
<https://ameblo.jp/jceti/entry-12618669101.html>

スティーブン・グリア博士は元軍医で、個人的な覚醒体験をきっかけに UFO 研究者になった人だ。この後、このグリアは CSETI\*<sup>2</sup> という組織を立ち上げた。そこで、これまで米国内の責任ある地位の人々から UFO ならびに宇宙人の目撃などの証言者を集めていった。そうして、2011年の夏を迎えたちょうどこの頃、本格的な UFO・宇宙人暴露の公聴会をアメリカ議会の記者クラブで行っ

---

\*<sup>2</sup> The Center for the Study of Extra-Terrestrial Intelligence, 地球外知性研究センター

た\*<sup>3</sup>。これがディスクロージャー・プロジェクトである\*<sup>4</sup>。だから、ニューヨークの同時多発テロもグリア博士らの暴露公聴会を妨害して隠蔽するためだったのではないかとも考えられた。

このクーパー講演の中およびその元原稿に、彼はそれまでに米軍の内部にいた頃から自分で調べ上げた情報を公開した。それによれば、当時 UFO の撃墜や墜落は次のようなものだった。

1947年1月から1952年12月までに、少なくとも16基の円盤の破損事故あるいは墜落事故があった。66体の宇宙人の内、1体は生存し、他65体は死亡した。16基のうち13基はアメリカとメキシコの国境付近で起こった。アリゾナで1基、ニューメキシコで11基、ネバダで1基が墜落。残りの3基は、ノルウェーで1基、メキシコで2基だった。この中には空中爆発したものは含まれていない。この当時の UFO 目撃事件は無数。

この中で、特に、ニューメキシコ州アズテック (Aztec) で起こったものが2つあった。1948年2月13日のアズテックと1948年3月25日のアズテック近郊のハートキャニオン (Hart Canyon) のものである。円盤は直径100フィート (約30 m) あり、死体は17体の宇宙人であった。そして、問題は、それに混じって「人間の身体のバラバラ死体の数々」が発見されたことだ。

1949年生存の宇宙人は「EBE (イービー)」と命名された。こやつは1952年まで生存した。そして翌年の1953年には、

---

\*<sup>3</sup> スティーブン・M・グリア&セオドア・C・ローダー三世著「DISCLOSURE PROJECT BRIEFING DOCUMENT(公開プロジェクトの概要書)」(2001, 4)

\*<sup>4</sup> スティーブン・M・グリア編著/廣瀬保雄訳「ディスクロージャー 軍と政府の証人たちにより暴露された現代史における最大の秘密」(ナチュラルスピリット, 2017)

少なくとも10機以上の円盤の破損事件があった。うち10機が回収された。そこから26体の死んだ宇宙人と4体の生きた宇宙人を回収した。4体中1体は破損円盤回収中の1時間内に死亡した。他は2、3日後死亡。10基中、アリゾナで4基、テキサスで2基、ニューメキシコで1基、ルイジアナで1基、モンタナで1基、南アフリカで1基。100ほどのUFOの目撃があった。

そんなわけで、1948年から1953年の6年間に少なくとも26基の円盤墜落事件があり、93体の宇宙人が回収されたのだ。その内訳は、次の通りだった。米国内22基：ニューメキシコ12基、アリゾナ5基、テキサス2基、ネバダ1基、モンタナ1基、ルイジアナ1基、海外4基：メキシコ2基、ノルウェー1基、南アフリカ1基。このエリアンの種族は、多くは、いわゆる「グレイ」タイプだった。中には「インセクトタイプ（昆虫型）グレイ」もいた。「ロング・ノーズ・グレイ」タイプではなかった。（詳細は不明）

1953年頃、「人間型 (human-looking)」宇宙人が米政府に面会した。これが今日プレイディアン（プレアデス星人）と呼ばれるものだ。彼らは米政府に核兵器破棄を提案したのだ。

ところが、この翌年の1954年に地球周回軌道に「ロング・ノーズ・グレイ」タイプの宇宙船団がやってくる。そして、この種族はアイゼンハワー大統領と面会した。第一回目で1体のエリアンが人質として滞在した。この宇宙人は「OHKrill」（オー・エイチ・クリル）と命名された。これは「人質第一号クリル」（Original Hostage Krill）という意味だ\*<sup>5</sup>。そして、第二回目の接近遭遇で、

---

\*<sup>5</sup> この宇宙人の名前は、その宇宙人には聞こえがいいように「全能の高みにある Krlll(Omunipotent highest Krlll)」という意味だと言って、「Krill（クリル）」と発音し、「KRLLL」あるいは「CRLLL」というつづりにした。その

密約和平協定を結び、フォーコーナース (Four corners) の深部地下基地に住み着いた。16人の宇宙人を密使として残し、後は16人の地球人を連れて母星に旅立った。

この大事件を米軍の一書紀として従軍し、「グラッジ13」を記録したのが、アレン・ハイネックだった。後にこのハイネック博士が当代随一の UFO の専門家となり、ハイネックの原則を作ったのだ。それがこれだ\*6。

1. UFO を報告するのは UFO “マニア” に限られている。
2. UFO 報告は頼りない、信頼できない、教養のない人物から寄せられる。
3. 科学的素養のある人物が UFO を報告したことは一度もない。
4. UFO が至近距離で目撃されたことはなく、報告はいつも曖昧である。
5. 空軍は、UFO が地球外起源の存在である、あるいは、ある種の高度なテクノロジーを示している、という証拠をつかんではいない。
6. UFO の報告はマスコミが世間に広めた。
7. UFO はこれまでレーダーで捕捉されたこともないし、流星カメラや衛星追跡カメラで撮影されたこともない。

これは UFO の目撃をカバーアップ (隠蔽工作) するためのものだ。なぜなら、この条件に当てはめられた目撃のほとんどが偽物認

---

一方で、宇宙人の背後では、大げさな名前は使わないというアメリカの伝統に基づき、宇宙人は秘密裏に「最初の人質クリル (Original Hostage Krill)」ないしは単に「OHKrill」と呼ばれた。

\*6 アレン・ハイネック著「科学的研究の価値がある UFO」

定されるのだ。実はこのハイネック博士こそ「カバーアップ (隠蔽) 工作」のエージェントであった。このことから、こういったキャンペーンはすべて「スノーバード」\*7プロジェクトに端を発していると考えられる。ついでに付け加えると、上の条件の中の「UFO」の部分「超能力」、「テレパシー」、「宇宙人」、「マイナスイオン」、さてまた「偽科学」などに置き換えても大筋においてそのまま成り立つ。同時に、こういう論法で物事の真実を覆い隠そうとする人々は同じような精神構造の持ち主と言えるのだ。

ちょうど我が国では、矢追純一の UFO 番組の時代の寵児となった。そして UFO の専門アドバイザーとしてスティーブン・スピルバーグの「未知との遭遇 (第三種接近遭遇)」を監修したのだ。だから、この映画「未知との遭遇」はアイゼンハワー大統領のロング・ノーズ・グレイとの謁見を描いた実話なのである。とまあ、こんなことが第二次世界大戦直後に起こったらしい。ここからすべてが始まった。

では、なぜこの事件にニコラ・テスラが関係するのか？

実は、それより半世紀前、ニコラ・テスラはで自分の強力な電磁波を放出できる電波塔を作った。おそらく、あのテスラタワーだ。これはヘルツ型の無線のものではない。当時、ニコラ・テスラは西洋社会の寵児だった。アメリカには3人の時代の寵児が存在した。アメリカ生まれの発明王で直流発電のトーマス・エジソン。彼のライバルだったクロアチア生まれの交流発電のニコラ・テスラ。そしてもう一人、エジソンの片腕として終生エジソンの作った会社 GE

---

\*7 「” 赤い光 ” の目撃はどんなものでもそれは空軍の実験であった」と説明するために、コードネーム「スノーバード (Snowbird)」プロジェクトが展開されました。

で働き、ニコラ・テスラの実験の数学的理論的解析を行った、スイス生まれの交流理論のチャールズ・プロテウス・スタインメッツ\*<sup>8</sup>。この3人だ。彼らは当時ノーベル物理学賞の候補者だった。実際に1915年にエジソンとテスラはノミネートされたという噂が流れるほどだった。しかし、そのチャンスは第一次世界大戦勃発のため消滅した。

そんな時代に、ニコラ・テスラは、当時の西洋マスコミと一つの大イベントを実施したのだ。それが、宇宙へ向けての電波メッセージの放出だった。

「宇宙人のみなさま、もしこの電波を受信されたなら、ぜひ我が地球へおいでください。お待ち申しております」

こんなふうなメッセージを打ち上げたのだ。彼らは宇宙人がいるとは微塵も考えなかった。自分たち西洋人の科学の発展を誇るために、面白半分にはやってみようかと思っただけだ。これは、戦後になって、最近までアメリカのNASAが宇宙へ電波メッセージを発信したり、情報を書き込んだタブレットを人工衛星にはめ込んで宇宙へ放出したりというようなことの走りだったのかもしれない。まったく同じ発想である。

ところが、ニコラ・テスラたちが行った20世紀初頭から50年ほど経って、実際にUFOが地球を訪れたのだ。この意味で、ニコラ・テスラの置き土産といえるのだ。

しかしなぜ宇宙人がこの地球に興味を持ったのだろうか？ 単に

---

\*<sup>8</sup> 「ジョン・ウィンスロップ・ハモンド著/田中聲識訳「スタインメッツ伝：小さな巨人/電気工学の父」(コロナ社, 1930). これは再販されている. John Winthrop Hammond, *Charles Proteus Steinmetz*, (Rough Draft Printing, 2008).

テスラが放った電波を聞いたからだろうか？

ところで、「未知との遭遇」の最後のシーンを覚えているだろうか？

たしか何人かの宇宙人が地球に残り、かなりの数の地球人たちが宇宙人の宇宙船に乗り込んだ。それと同じように、ロング・ノーズ・グレイ型宇宙人の宇宙船に米兵の16人が乗り込んだのだ。

はたしてその16人はその後どうなったのだろうか？

実は彼らは大半が1960年代に帰ってきたらしい。そして、宇宙人の星で学んだことを米軍に伝授した。リバーズエンジニアリングだ。

かつて我が国の勝海舟が咸臨丸でアメリカのサンフランシスコに渡った。そこでの見聞きしたことを江戸末期の幕府の御家老たちに見聞録として手渡した。「亜墨利加は上へ行くほど怜悧でござる」とは、その時に海舟の意見をないがしろにした家老たちへの痛烈な皮肉だった\*9。一方、山口から大英帝国へ留学したのが、長州ファイブ。伊藤博文、井上馨、井上勝、遠藤謹助、山尾庸三の5人だった。彼らは英国で学んだ最先端の知識を長州にもたらした。そこから明治維新につながったのだ。

アメリカ軍はこれと同じことを行ったのだ。この事実はごく最近になって、ケリー・キャシデーとビル・ライアンのキャメロットインタビューやデービッド・ウィルコックスのコズミック・ディスクロージャーの中で、実際に乗り込んだ米兵たちの本人の口から明かされた。今ではYouTubeでこれを見ることができる。

---

\*9 勝海舟著「氷川清和」(講談社、2000年)

## 7.2 コース大佐の証言：戦後の科学技術はロズウェルから生まれた

フィリップ・ジェームズ・コース大佐をご存知だろうか？



図 7.3 フィリップ・ジェームズ・コース大佐。  
1915年5月22日 - 1993年7月16日。  
<https://ameblo.jp/siyohtomiyama/entry-12631338270.html>

1970年代後半から1990年代、我が国では矢追純一さんのUFO特番の時代だった。この番組に、ある米軍関係者のコース大佐 (General Philip J Corso) と名乗る人物が登場した。

このコース大佐は、ロズウェル事件の現場責任者の一人だった\*<sup>10</sup>。彼らは、ロズウェルで墜落した円盤から採取した破片から、

---

\*<sup>10</sup> フィリップ・ジェームズ・コース大佐著/中村 三千恵 訳「ペンタゴンの

よくわからない装置のようなものや物質や部品を集めた。彼は、その当時の上司であるプルドー将軍から「それらを軍で研究し、同時に一部は民間企業に送るように」命令されたのだ。そこで、”出所を絶対に秘密にする条件で” IBM やベル研究所などの民間企業に送って研究させた。彼ら民間企業の研究所の研究者がそれで特許を取ったものも多い。日本の企業などにも情報を流したと彼は証言したのだ。

この時、彼が研究委託したテーマは、少なくとも次のようなものだった。

1. トランジスター
2. 半導体素子
3. レーザー
4. 発光ダイオード
5. 光ファイバー
6. 集積回路 (IC)
7. 形状記憶合金
8. 超強力繊維
9. 暗視 (CCD) カメラ
10. 脳波コントローラー
11. 戦闘機のステルス技術

したがって、これらのテクノロジーのアイデアは、ロズウェル事

---

陰謀」(二見書房, 1998年). Philip J Corso, The Day After Roswell (Pocket Books, 1997).

件で墜落した、ステルス戦闘機型 UFO の破損した UFO やその部品を回収する中から得られたものだ。これらのテーマからすでにいくつものノーベル賞が出ている。

ところで、ここでいう IBM の研究所とはトーマス・J・ワトソン研究所 (通称、ワトソン研究所) のことだ。。ここには我が国の江崎玲於奈博士が所属した。そこで、分子線エピタキシー (Molecular Beam Epitaxy, MBE) という技術を開発した。これにより、2次元薄膜状の半導体が作れるようになり、世界の半導体テクノロジーに革命を起こした。その時すでに江崎博士はエサキダイオードの研究でノーベル物理学賞を受賞されていた。しかし、この装置の発明でもう一つのノーベル賞をもらっても不思議ではない。それほどの大発明だった。その後の量子ホール効果は、2次元半導体を作り出されるようになって初めて発見されたからだ。



図 7.4 ATT のベル研究所

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ベル研究所>

一方、ベル研究所 (通称、ベル研) というのは、アメリカ電信電話会社 (ATT) の基礎研究所のことだ\*<sup>11</sup>。我が国には、半導体産業の雄である富士通、NTT、NEC、シャープ、松下電器、東芝、かつてのサンヨーなどがある。

こういった大企業が、なぜ基礎研究所を持つようになったか？

それは、日本の大企業が、IBM のワトソン研究所やベル研を真似たからだった。それほど、戦後の全世界において、IBM ワトソン研究所と ATT ベル研は模範だった。

当時、我々日本の物性物理学者がアメリカに留学する場合、実験や理論を問わず、留学先の第一志望がこれらの研究所だった。事実、東京大学の物性研究所の歴代の所長は、大半がこれらのどちらかへ留学している。当時のベル研にはノーベル賞級の学者が20人ほど存在した。実際に7人がノーベル賞を受けた。情報理論のクロード・シャノンもベル研にいた。そんな最高の知性のいる場所に教えを受けに行くこと。これが当時の我が国の物性物理学者の仕事の一つだった。また、学生にとってはもっとも理想的な職場だった。アメリカの大学院で博士になった直後、このワトソン研やベル研のポスドクになる。これが1980年代の最もステータスの高い出世コースだった。なぜなら、これらの研究所のポスドクは、任期満了後すぐに大学の職員になれたからだ。それほどレベルが高かった。

ところが、ベル研は2008年に突然廃止された。その活動を停止した。この理由はいろいろあるが、おそらく最初のコース大佐から受けた任務がほとんど完了したからに違いない。

---

\*<sup>11</sup> <https://ja.wikipedia.org/wiki/ベル研究所>

さらにコース大佐とその息子の証言によれば、まだ次のような研究テーマが存在した。a. 小型のフットボール大の原子炉発電機  
b. 電圧制御で透明化する金属板

このコース大佐の時代は、まだ米ソ冷戦の真っ最中だった。21世紀のいまは、今度は米中冷戦の真っ只中だ。当時はソ連のスパイがたくさんアメリカ内に潜入していた。だから、こういった情報は一切誰にも話すことが出来ず、極秘扱いにされたのだ。そういう時代だった。

## 7.3 米軍は地下基地で何を研究していたのか？

我が国では、ロズウェル事件は一種のファンタジー。SFのネタでしかない。しかしアメリカの場合は、実際に地下基地が存在し、それはたくさんの場所に設置された。それが通称ネバダ州のラスベガスの近郊にある「エリア51」という場所だ。

地下に研究都市を地下基地を作るというこの発想は、昔からあるありふれたやり方だ。戦前では、ヒトラーのナチスがノルウェーやドイツの山岳地帯などの洞窟を利用した。我が国も地下壕や地下都市に本土決戦に備える地下要塞を作った。実際に、米軍の航空機から見えない場所で、ナチスのヴリル教会とトゥーレ教会という2つの組織が円盤型航空機の開発を急いだ<sup>\*12</sup>。その中に、シャウベル

---

\*12 落合信彦著「20世紀最後の真実」(集英社、1980年)。

ガー博士がいた\*13。

現代では、我が国では岐阜県の神岡鉱山内にカミオカンデやスーパーカミオカンデやかぐらを建設している。ここからノーベル物理学賞が2つ出た。小柴博士のニュートリノの発見と梶田博士のニュートリノ振動の発見に対してである。だから、米軍が外国から人工衛星や航空写真でモニターされないように地下に研究所を作るというのは当たり前なのにすぎない。

米軍は地下基地でグレイ・宇宙人と何を研究していたのか？

実は、こうした地下研究所から研究者が外部に出てくることもある。その人物が、任期を終えたり、用無しとなったり、あるいは、逃げ出した場合である。私が知るだけでも、かなりの研究者が表に出てきた。こうした表に出てきたジェーソンの科学者はそのまま表の有名大学の教授になる場合も多い。フリーの学者として独自に自分でベンチャーを立ち上げてそこで研究する人もいる。

有名な例は、1970年代に現れた

・スタン・デヨ (Stan Deyo) 博士、電磁気型反重力エンジン  
に始まり、1980年代に現れた

・ハロルド・ピュートフ (パソフ) 博士、MK ウルトラ、テレパシー  
・ボブ・ラザー博士、核融合型反重力エンジン

1990年代に現れた

・アンディー・バシアゴ博士、トランスポートーション

2000年代に現れた

・マーク・マッカンドリッシュ博士、フラックスライナー反重力エ

---

\*13 アリック・バーソロミュー著/野口正雄訳「自然は脈動する：ヴィクトル・シャウベルガーの驚くべき洞察」(日本教文社、2008年)。

## エンジン

- ・デービッド・アデア博士、シンビオテック反重力エンジン
  - ・アーロン・マッコラム、人宇宙人混合スーパーソルジャー
  - ・ジョームズ・コズボー、人間サイボーグ
  - ・ダン・ブリッシュ博士、ルッキンググラス
  - ・ヘンリー・ディーコン博士、ルッキンググラス
  - ・デービッド・ルイス・アンダーソン博士、タイムマシン
  - ・ポール・ラビオレッテ博士、非アインシュタイン型深宇宙構造
  - ・エリック・ドラード博士、ニコラ・テスラ電磁気
- などなど、きりがなほどだ。

これらの人々へのインタビューは有名な「プロジェクト・キャメロット」\*14のインタビューに掲載されている。この番組には多くのUFO 研究者や陰謀研究者もインタビューを受けている。だから、UFO 研究者デービッド・ウィルコックスも最初はキャメロット・インタビューでインタビューを受けた。

ところが、21世紀になると、そこでインタビューを受けた方のUFO 研究者デービッド・ウィルコックスが「コズミック・ディスクロージャー」という番組を作り、多くのスピンアウトした人たちから最新の情報を取り上げた。ここで初めて1960年代にグレイ宇宙人のUFOに乗った人たちが登場するのだ。それが、

- ・ピート・ピーターソン博士、宇宙人宇宙船操縦
- ・ウィリアム・トンプキンス博士、地球防衛軍ソーラーウォーデン設計者
- ・コーリー・グッド、宇宙語通訳者、秘密宇宙計画

---

\*14 Project Camelot Library: <https://projectcamelot.org>.

・エメリー・スミス、宇宙防衛軍医  
・ランディー・クレイマー (キャプテン K)、米地球防衛軍人  
などだ。彼らが最初に宇宙人の UFO に乗り込み、宇宙人にナビゲートされ、宇宙を旅し、広い宇宙を見聞した。そして幾多の困難を乗り越えて再び地球の地上へ舞い戻った。そういう強者たちの一部だ。彼らがりヴァースエンジニアリングにより地上の科学者にその技術を教え指導したのだ。

どうだろうか？

米軍の最高レベルで、いかなることを行っていたか？ いかなることをいま行いつつあるか？ すこしは垣間見えてきたのではないか？

しかしながら、いきなりこういう話をしてもついてこれないかもしれない。そこで、まずは手近なところから古い順にみていこう。

## 7.4 スタン・デヨ博士の登場：電磁反重力エンジン：ボスはエドワード・テラー博士だった！

まずはスタン・デヨ博士を知っているだろうか？

1977年頃、西洋社会に突然スタン・デヨ博士<sup>\*15</sup>という名前の謎の博士が登場した。この番組が「UFOs are here」<sup>\*16</sup>である。我が国では有名な矢追純一さんの UFO 特番の時代だった。この時、彼はエリア 51 における研究状況を突如暴露したのだ。

---

\*15 彼はいまはオーストラリアにいる。 <https://standeyo.com>.

\*16 Ufos are here 1977 - 1 part: <https://www.youtube.com/watch?v=VtpNcWO3Rfw>



図 7.5 ス タ ン・デ ヨ 博 士 。

<https://www.gofundme.com/f/stan-deyos-energy-research-fund>

それによると、エリア51のジェーソン・スカラー<sup>\*17</sup>を取り仕切るのは、水爆開発でノーベル物理学賞を授与されたエドワード・テラー博士だったと証言したのだ。

さらにスタン・デヨ博士はその時に研究プロジェクトが次のようなものだったと暴露したのだ。

- (1). 反重力装置と空飛ぶ円盤技術。
- (2). 新型の薬。電磁プラズマやバイオプラズマを使い皮膚や組織の再生回復ができる技術。
- (3). 電線なしに電力を輸送する技術。
- (4). 光速度より早く運動する技術。これはまだ理論上。
- (5). プラズマ衝撃波兵器技術。
- (6). 極低周波の電磁波で人の心をコントロールする技術。

---

<sup>\*17</sup> Jason Scholor とは米軍内の極秘研究を行う専門の科学者たちのグループを指す。



図 7.6 エドワード・テラー博士。  
1908年1月15日 - 2003年9月9日。  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/エドワード・テラー>

スタン・デヨ博士自身は (1) の部門に所属した。(3) はつい最近になって先進国の多くの大学や企業が新規参入してきた電力輸送の方法で、もともとニコラ・テスラが発明したアイデアである。(5) もすでに以前のブログで紹介したように、英米オーストラリアでは「ビーム兵器」という名で開発済みである。そして、(6) は「HAARP」以外の何者でもない。まだ知られていないものが、(1) の反重力装置、(2) の電磁波によって細胞を再生する薬や技術、(4) の光速度を超える飛行物体、などである。しかし、(1) の反重力装置について2008年にオーストラリア以外では初めて一般人に公

開したという、あの YouTube の講演だった\*18。

これらの技術は1977年のことだ。我が国ではキャンディーズの全盛時代のことだ。だから、米軍の極秘研究所では、いまから44年前にはこの段階に進んでいたのだ！

後に、スタン・デヨ博士自ら公に出るようになり、彼自身の口から詳細が語られた\*19。彼はアメリカのテキサス州ダラス生まれのオーストラリア在住アメリカ人だった。彼自身はアメリカ国内で働いたのではなかった。彼は長年オーストラリアの中央砂漠の地下に建設された極秘基地で働いたのだ。ここが通称エリア52 (Area52) である。

実は彼の父親も米空軍士官だった。彼は知能が非常に高い若者だった。彼は生まれながらに抜群の数学的才能を示し、すぐに米空軍アカデミー (US Air Force Academy) に入隊した。彼はコロラドの麓にある空軍基地内で勉学や訓練を受けた。つまり、彼は生まれながらにして米空軍に入るべくして入隊したのだ。

アメリカ社会の一部には、こうした非常に特殊な家系が少なからず存在する。こうした家庭は「ある種の天才家系」として有名なのだ。その1つに生まれた人物だ。元 NASA テストパイロットだったジョン・リアー氏もそうだ。RCA のエリック・ドラード博士もそうだ。

かつての我が国でもそうで、東京帝大教授の息子は帝大に無条件

---

\*18 AntiGravity explained and produced!! Amazing! : <https://www.youtube.com/watch?v=BmHg6LxQSJw>.

\*19 Stan Deyo, The Vindicator Scrolls (Adventures Unlimited Press, 1989); The Cosmic Conspiracy (Adventures Unlimited Pr; New, Revised 版, 1996).

で入れた。大日本帝国軍の海軍将校、陸軍将校、空軍将校の息子たちは、それぞれ海軍機関学校、陸軍士官学校、空軍士官学校に入った。蛙の子は蛙。古今東西、これはどの国でも同じことだ。

興味深いのは、その米空軍アカデミーの教育法だ。その方法がとてつもなかった。スタン・デヨ博士が米空軍アカデミーで受けた授業というのは、こういうものだった。

まず空軍の司令部が授業用の教科書として科学の専門書を選ぶ。教官はその本の全ページを全部ページごとにマイクロフィルムに撮影。それを教材にする。授業クラスには若い軍人が数十人いる。生徒たちは当然選りすぐりの天才的な特殊な驚異的知能を持つものたちだ。授業が始まると、教官は映写機で大画面にその映像を毎秒200ページの速さで生徒たちに見せる。生徒たちはそれをただ見続ける。毎秒200ページだ。あっという間に1冊が終わる。それが終われば、また別の1冊と続くように、何千何万冊の専門書の内容がマイクロフィルムにつながっている。当然だれも何が書いてあるのかわからない。それを何ヶ月も繰り返していく。すると、何千何万冊の専門書の内容を記憶の奥底に記録することができるのだ。これは学生の潜在意識に映像記憶を植え付けるやり方だ。そうになると、ある数式やあるテーマが知りたいという時に瞬間的にそのページが「出現する」というのだ。

おそらく、米空軍アカデミーは、日本で言えば、戦前の東大航空宇宙工学科のようなところである。そう考えると比較的分かりやすい。戦前では、日本でも天下の天才秀才はそこに進学したからである。そして、零戦や戦艦大和などの建造の基礎を学んだ。これと同じように、米空軍アカデミーではアメリカ国内の俊友を集め、そこで天才教育し、世界最高の兵器科学の研究をさせるのだ。

1977年当時は、スタン・デヨ博士は研究テーマや指揮者のことはインタビューに応じたが、実際に自分たちが具体的にどんな研究をしていたのかまでは話さなかった。おそらくUFO番組ではインタビューの時間がなかった。ところが、その後エリア52から出てきた時には、それを話したのだ。彼のグループが研究していたのはプロジェクト暗号名「ローレンツO」だった。これは、電磁気学のローレンツ力を応用した電磁反重力の研究だった。ある方向に強力な磁場を加える。それに垂直に強力な電場を加える。すると、双方に垂直に強力な力が生まれる。これがローレンツ力だ。これによりその力の働く空間内にある電荷を帯びた粒子が磁場の周りに回転し始める。ところが、実はこれまでの電磁気学で教えられているローレンツ力とは異なるものが存在するのである。そのあまり知られていな電磁気学の未知の効果で空中浮遊させる。そういう研究だった。

スタン・デヨ博士は若い頃に軍将校にやっていることを説明するデモ実験をフィルムに残した。それによれば、中央に透明なガラスのシリンダーを置き、その中に食塩水を入れる。その中央に金属棒を指しゴム封印する。シリンダーの外面に別の金属箔を巻き、その外に永久磁石のリングを置く。そして、一般の交流電源から直流高電圧に変換し、正負の電極をそれぞれその内部の金属棒と外面の金属箔につなぐ。そうすると、電圧が内部から外部へかかる。すると、内部にある食塩水が高速に回転運動を始める。こんな実験映像だった。はたしてこれが反重力の何と結びつくのか？ これはオリヴァー・ヘビサイドが理論化したアイデア<sup>\*20</sup>を検証するための基

---

<sup>\*20</sup> O. Heaviside, "A gravitational and electromagnetic analogy". The

礎だったのではなかろうか？

ずっと後の比較的最近の物理の研究で、電磁的に水銀を高速回転させると重力電磁気効果 (gravito-electromagnetic effect)<sup>\*21</sup>が誘導される、というものが出てくる<sup>\*22</sup>。実は、非常に重い物体が円周状に高速運動するとその円の中心部に反重力が誘導されるのだ。ヘビサイドはこれをマックスウェルの理論を重力に拡張する形で理論化した。これが、ヘビサイド-フォワードの理論と言われるものだ<sup>\*23</sup>。ローレンツ力をこの理論に使うのだ。

このように、1947年のロズウェル事件以来、米軍は本気になった。そして、密かに米国の白人種の天才たちを集めて反重力などのさまざまな宇宙人由来の研究を行って来たのだ。いつの日か、米軍製を生み出すためだ。それを総指揮したのが水爆の父として後々ノーベル物理学賞受賞したエドワード・テラー博士だったのだ。

## 7.5 極秘研究開発の肝：区分化タコツボ化

ところで、そうやって多くの研究者が世に出てきたのに、どうして独自に空飛ぶ円盤を作れないのか？

それは、むろん研究予算というお金の問題もあるが、一つには

---

Electrician. **31**, 81–82 (1893).

<sup>\*21</sup> Gravitoelectromagnetism, <https://en.wikipedia.org/wiki/Gravitoelectromagnetism>

<sup>\*22</sup> Huei Peng, "A New Approach to Studying Local Gravitomagnetic Effects on a Superconductor", *General Relativity and Gravitation*, **22**(6) 609–617 (1996).

<sup>\*23</sup> Robert L. Forward, "Guide to Antigravity", *American Journal of Physics*, **31**(3), 166–170 (1963).

「区分化 (Compartmentalization)」というものがある。これは、そこで働く一人ひとりが自分が行う部門しか知ることが出来ないように極めて狭い専門領域に閉じ込めるというやり方のことだ。つまり、円盤の1個1個の部品は担当された学者が研究開発するのだが、自分は「いま何を作っているのか知らない」「いま何の部品を作っているのか分からない」状態に置く。そして、もっともクリアランスレベルの高い部門で初めてアSEMBル（組み立て）を行う。だから、研究に参加している誰一人もそれが何の目的のものかわからない。仮にそれがわかったとしても、自分ができるのはその部品の開発だけで、全体を組み立てることが出来ない。こういうやり方のことだ。

ところで、アメリカ人の UFO 研究家のマイケル・シュラット博士によれば、このクリアランスのレベルには次のような階層がある。

1. 宇宙マジエスティック (cosmic MJ)-10 レベル (MJ1-10)
2. 極秘暗号 (top secret crypto)-20 レベル (1...17...20)
3. 未承認の特別アクセスプログラム (USAP, unacknowledged special access program)
4. 特別な区分化された情報 (SCI, special compartmented information)
5. 最高機密 (top secret)
6. 機密 (secret)
7. 秘密 (confidential)
8. 制限 (Restricted)

大統領は、2の20レベルのうちの17番目である。これがアメリカの戦略軍基地にある核ミサイルの発射ボタンを扱えるレベルなのだ。それから先は大統領にもまったくタッチできない。そういうレベルが存在するのだ。ここで、MJというのは、矢追純一さんの時代の「マジスティック12 (MJ12)」と呼ばれたものである。だから、本当はMJは12まで階層がありそうだ。

これについては、ウィリアム・クーパーがその詳細を語った。メンバーは誰もが知る人々だ。ロックフェラー家代表、国防長官、国務長官、中央諜報局 (CIA) 長官、(陸海空軍) 統合参謀本部議長、FBI 長官など政府代表6人と、米国を代表する科学者6人。初代の政府代表は次の6人だった。

- ・ネルソン・ロックフェラー、
- ・CIA 長官アレン・ウェルシュ・ダレス、
- ・国務長官ジョン・フォスター・ダレス、
- ・国防長官チャールズ・E・ウィルソン、
- ・(陸海空軍) 統合参謀本部議長アーサー・W・ラドフォード提督、
- ・FBI 長官 J・エドガー・フーバー

一方、科学者は賢人会議 (ワイズメン) の代表6人である。

- ・ジョン・マックロイ博士、
- ・ロバート・ラベット博士、
- ・アヴェレル・ハリマン、
- ・チャールズ・ボーレン、
- ・ジョージ・ケナン、
- ・ディーン・アチェソン

このグループには、

- ・ジョージ・ブッシュ・シニア、

- ・ゴードン・ディーン博士、
- ・ズビグニュー・ブレジンスキー博士、
- ・ヘンリー・キッシンジャー博士、

なども含まれた。この学者たちが、自分たちを「ジェーソン科学者 (Jason Scholar)」と呼んだのだ。

この MJ12 が後に次々と、最高責任者 (top officers)、司令官 (directors)、外国関係諮問委員会 (Council for Foreign Relations)、後に、三極委員会 (trilateral commission) を作り出した。そして日米賢人会議のようなものにより、我が国はこの下部構造に組み込まれたのだ。これが、影の政府の始まりだった。いわゆる軍産複合体の司令部である。大統領府の中にもう一つ政府（政府内政府）がある形はこの時に始まったのだ。同時に、この政府内政府が表の世界における UFO・宇宙人情報の隠蔽工作を行うようになった。トランプとバイデンとの米大統領戦に関わる形で、最近流行りの Q-アノンがこれを Deep State(DS) と呼ぶようになった。それで一気に一般人にその存在が知られるようになった。しかしこれはテスラの時代からあったものにすぎない。

実は歴史を遡ると、CIA はニコラ・テスラの時代にはまだ存在しなかった。テスラの時代、電波技術が世界最先端だった。遠隔で無線通信できるというの軍隊に取り最重要のテクノロジーだ。だから、米政府はテスラの最先端の電波技術が他国へ移るのを極端に恐れた。そこで、誕生したのが、アメリカ電波会社、通称 RCA だった。この RCA は電波技術の特許、技術そういうものをことごとく集め、その開発者を脅して黙らせたのだ。場合によっては外患誘致罪適用で暗殺したり、獄中死させた。ニコラ・テスラが研究所を破壊されたり、その後研究活動を制限されたのは、この状況が大きい。

当時はまだ第1次世界大戦前だった。このRCAが第二次世界大戦後に組織の拡大改変によりCIAになった。

トランプ大統領がニコラ・テスラに造詣が深いらしいと言われたのをご存知だろうか？

その理由は、彼の叔父がRCAの職員で、ニコラ・テスラの研究記録や装置を没収隠蔽する工作隊員の一人だったからだ。そして彼らは極秘で独自にテスラの技術を研究した。その叔父がニコラ・テスラのことを若きトランプに話したのだ。だから、トランプはそういう未知の未来技術のことをかなり聞き知っていたというわけだ。

ところで、有線の電信技術は我が国で言えば、江戸時代に発明されたのだ。その当時、佐賀の鍋島藩に大英帝国の寄港できる港があった。その頃、長崎の佐世保港はオランダの支配下にあった。鍋島藩はその時代に上海までのケーブルを伸ばした、有線による電信が完成されていた。なぜなら、大英帝国の黒船がそこに着岸するわけだから、黒船は最新情報は電信で伝達したい。だから、上海から佐賀まで電信網を延長したのだ。上海からインドまではすでに電信網ができていた。だから、当時の佐賀藩では、上海経由、カルカッタ経由で、ヨーロッパまで電信であつという間に情報伝達できたのだ。事実、明治維新後、我が国で最初に電信を生み出したのは、旧鍋島藩の侍だった。それが我が国の電信電話の基礎を生み出したのだ。

ここにマイク・ガルブレイスの「日本の電信の幕開け—江戸末期から明治にかけて、日本は世界の国々とどのようにして結ばれていったのか」という論文がある。それによれば、公式に我が国が国際電信条約に加盟したのは、1875年だったとある。

だが革新的な電信サービスの推進国である米国と英国は参加していなかった。(英国は1871年に加盟。) 意外なことに日本は、ローマで開催された第3回万国電信会議(1871-1872年)にオブザーバーとして塩田三郎氏を派遣、サンクトペテルブルクで開催された第4回万国電信会議(1875年)には3人のオブザーバーを送っていた。1879年1月17日に、日本は設立20加盟国から数えて19番目の万国電信連合の加盟国となった。米国は1908年、アジアの主要国であるインドが1869年、タイが1883年、フィリピンが1912年、中国が1920年、インドネシアが1949年、そして韓国が1952年の加盟なので、日本がいかに早い行動をとったのが分かる。

明治維新は、1868年だから、7年後には加盟できるだけの技術を持ったことになる。しかし、実際には、準備期間があるわけだから、それよりずっと前の江戸時代にはそういう技術を持っていたとしても何らの不思議はない\*24。

## 7.6 ボブ・ラザーのフュージョン・エンジン：Tr3B アストラの原理

ボブ・ラザー博士(Dr. Bob Lazer)を聞いた事があるだろうか？

1980年代になると、アメリカ人のボブ・ラザー博士(Dr. Bob Lazer)が登場した。彼は、ネバダ州にあるエドワード空軍基地内

---

\*24 保江邦夫著「語ることが許されない封じられた日本史」(ビオ・マガジン社, 2020年).



図 7.7 ボブ・ラザー博士。1959 年 1 月 26 日 - 。  
<https://darktides.net/bob-lazar-area-51-whistle-blower-or-master-of-hoaxes/>

の「エリア51」という地下基地で、グレイ・宇宙人の指導の下で、地球製 (made in USA) の UFO が建造されていたことを証言した。米軍は自分たちが宇宙人のテクノロジーを真似て作った円盤を ARV(宇宙人・リプロダクション・ヴィークル。宇宙人複製輸送機) と呼ぶ。今後、米軍製の空飛ぶ円盤、地球製 UFO はもう UFO ではないから、ARV と呼ぼう。その ARV の燃料は原子番号 115 の未知の放射性原子だった。

ラザーによれば、米軍が建造していた ARV にはハイテクのものからローテクのものまで7種類ほどあった。ハイテクのものは「スポーツ・タイプ」と呼ばれた。尖ったチャイナマンズ・ハット型 ARV は「ジェロニモ」と呼ばれた。ARV はそれぞれニックネームをつけて呼ばれた。最もローテクの原始的な ARV は、いわゆる「アダムスキー型 UFO」のようなものだった。彼がよく知っている

のは、そのうち最も原始的なタイプのものだった。

ARV の推進原理は、未知の放射性物質「115」の自然崩壊を利用する。この物質は、反物質を自然放出してあらゆる原子へと自然崩壊する。その際に、物質-反物質の反応を利用してエネルギーを得る。どういうわけか、この自然崩壊の際、「反重力」が生まれるのだ。この反重力は、我々地球人物理学者がまだ知らない「重力波 (gravitational wave)」を利用する。

この「重力波」は、「115」のエネルギーを進行方向に放出する。それが時空の歪みを作る。ARV は、進みたい方向に時空の歪みを作ってそこに引き寄せられる、つまり、前方に空間の穴を開けて、そこに引き込まれるという原理で推進する。ブラックホールほどではないが、かなりの空間の窪みを作り、そこに捕獲 (トラップ) されるのだ。最も原始的なタイプの ARV には底に3つの推進装置が付いている。推進方向は、その3つの組み合わせで決める。ARV 内部の人間は、ARV 自ら重力を作っているために、どんなに急激な方向転換でも特に問題なく搭乗できる。

通常、ロケット推進やプロペラ推進では、物質を後ろに放出してその反作用で前に推進する。つまり、ニュートンの法則の第3法則、作用反作用の原理を使う。しかし、波乗りサーフィンではサーファーが、いつも大波の斜面を前に滑り落ち続ける。それと同じように、ARV がその歪みに落ち込み続けるという形で前に推進するのだ。

これが、ボブ・レーザーが研究していた空飛ぶ乗り物だった。いずれにせよ、この推進技術では「115」なる放射性物質が必要だ。米軍にはグレイにより、何トンにも及ぶ「115」が存在するらしい。しかしながら、研究所でどうやってこの物質「115」を作っ

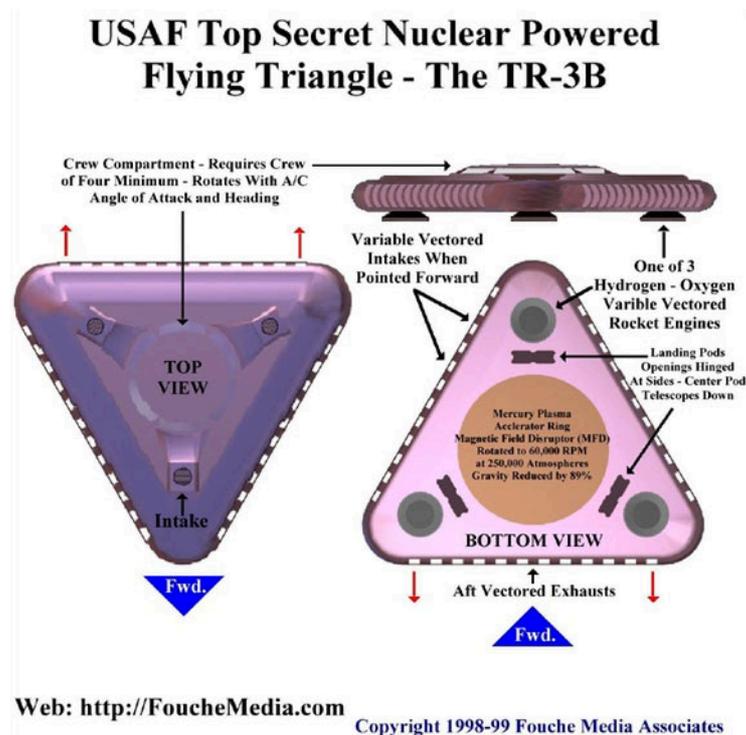


図 7.8 米 軍 製 UFO: TR3B Astra  
<https://ameblo.jp/dack-taturo41/entry-11758495777.html>

たか、どのように持ち込んだかについては、ボブ・レーザーは知らない。

この情報から推測すれば、この一番ローテクの ARV は、米軍の三角形の TR3B のことだったと思われる。この乗り物は最近になり、世界中でよく目撃されるようになった。

## 7.7 マーク・マキャンドリッシュのフラックスライナーエンジン

元米国空軍のマーク・マキャンドリッシュ (Mark McCandlish) をご存知だろうか？



図 7.9 元米空軍マーク・マキャンドリッシュ。  
<https://www.connectsavannah.com/savannah/sucker-punch-from-the-future/Content?oid=2267001>

この人物は、グリア医師の2001年(およびその後の2005年)の宇宙人・UFO暴露計画の時に現れた、元米軍兵だった。この話は、その公聴会のレポートであるグリア博士の「ディスクロージャー」に掲載された。しかし、我が国では公聴会が開かれた20

01年から16年後に出版された\*25。この人は空軍の航空宇宙部門の技術デザイナー兼イラストレーターだった。空軍の兵器や整備や精密機械のデザインや絵画を担当する係だった。彼は主に軍が製品を制作する軍産複合体の大企業群にそのイラストを書いた。彼が関わった大企業とはこんな企業だった。

- ・ゼネラル・ダイナミクス社
- ・ロッキード社
- ・ノースロップ社
- ・マクドネル・ダグラス社
- ・ボーイング社
- ・ロックウェル・インターナショナル社
- ・ハネウェル社
- ・アライドシグナル社

これらは通称スカンクワークと呼ばれ、ロッキードのベン・リッチが統括していた\*26 \*27 \*28 \*29。

その頃から彼は UFO 問題に関わるようになる。彼自身、196

---

\*25 スティーブン・M・グリア医学博士編者/廣瀬保雄訳「ディスクロージャー」(ナチュラルスピリット, 2017年).

\*26 Discussing "Sirius" | Inside The Documentary:  
<https://www.youtube.com/watch?v=59Jk-dAKYkg>

\*27 「ザ・シリウス」: スティーブン・グリア博士が語る”真実”とは!? 1:  
<https://quasimoto.exblog.jp/19725501/>

\*28 「ザ・シリウス」: スティーブン・グリア博士が語る”真実”とは!? 2:  
<https://quasimoto.exblog.jp/19725514/>

\*29 「ザ・シリウス」: スティーブン・グリア博士が語る”真実”とは!? 3:  
<https://quasimoto.exblog.jp/19725523/>

7年にマサチューセッツ州のウェストバー基地での勤務中、核兵器貯蔵区域の上空に静止した UFO を目撃した。それから、彼は徐々に UFO や ARV と関わるようになったのだ。

ある時、ジョン・エッポリトという人が、彼にマーク・スタンボーの話をした。このスタンボーは独自にビーフェルト・ブラウン効果の実験を行った。この効果はこの反重力の世界では1950年代の終わり頃から有名だ。これは金属の両側に直流高電圧をかけると、その金属に負の側から正の側に力が働き、正の方向へ動くという現象だ。この男スタンボーは、プレキシガラスかエポキシ樹脂の内部に金属銅板を埋め込み、内部の気泡を完全に除去して両側へ直流100万Vの超高電圧をかけた。すると、円盤が空中浮揚したのだ。つまり、スタンボーは独自に電磁反重力実験を行っていたのだ。

すると、早速あるところからエージェントが来て呼びがかかった。彼は捕らえられ、空軍基地の格納庫で尋問され、ひどく拷問された。しかし、彼は尋問に行く途中でその中に1機の空飛ぶ円盤を見たのだ。マキャンドリッシュはこの話を聞いたのだ。

さらに、ある時、昔の学校の同級生だったブラッド・ソレンソンという男が訪ねてきた。この人物は特許ビジネスですでに若くして大富豪になっていた。自分で特許になりそうなネタを探してきては自分で特許を取り、それを作る顧客を探す。顧客はその販売権を彼から買う。顧客がその製品を作って儲ければ儲けるほど、特許使用料が彼の懐に入る。こういうビジネスモデルだ。

たまたまこのソレンソンは近くのノートン空軍基地の行われる航空ショーにマキャンドリッシュを誘った。ところが、マキャンドリッシュは緊急のイラストの仕事が入り手が離せず、そこへ行くこ

とができなかった。そこで、ソレンソンは近所に暮らしていた別の隠居していた元政治高官といっしょに見に行ったのだ。ところが、その人物が曲者だった。米国の相当の高位の元政治家で、基地内の一番奥に入るアクセス権を持っていた。これがクリアランスだ。その場で、その老紳士がソレンセンに「中では、ただ沈黙して見ておけ。何に対してもうなずくだけで何もしゃべるな」と言った。そして老紳士の後についていくと、巨大な格納庫の一番内部の隠された領域に内部に、大中小3機の空飛ぶ円盤があったのだ。すべて空中浮遊して置かれていた。そこにはデモ用のビデオがあり、最小機の実演飛行が放映されていた。それには外壁の内側にNASAの人工衛星のようなロボットアームがついていた。蓋が空いて外へ飛び出る。だから、明らかに宇宙空間の飛行を念頭に置いたものだった。この最小機を彼は特許申請のプロだから、克明に頭に焼き付けた。そして、それを後日自分で特許申請書のように精密な絵にしたのだ。それをマキャンドリッシュに見せたのだ。それがこれだった。

これは宇宙人からリバーズ・エンジニアリングで作らせたものだ。つまり、ロズウェル事件由来のテクノロジーだ。これは、フラックスライナーと呼ばれた。実は、このモデルのアイデアがステーブン・スピルバーグに伝わり、デロリアンのフラックスエンジンのヒントになったと考えられる。

内部には球の空間があり、その上部にパイロットが乗る半球のスペースがある。コックピットだ。そこに放射状に座席が4つある。内部中央には幅は18インチ、厚さは8～9インチのプラスチックの円筒がある。その内部には銅コイルが15～20層に巻かれている。その円柱の中央下部にジャイロコマのような回転円盤がある。円盤の一番下に11～12インチの厚いプラスチック板が

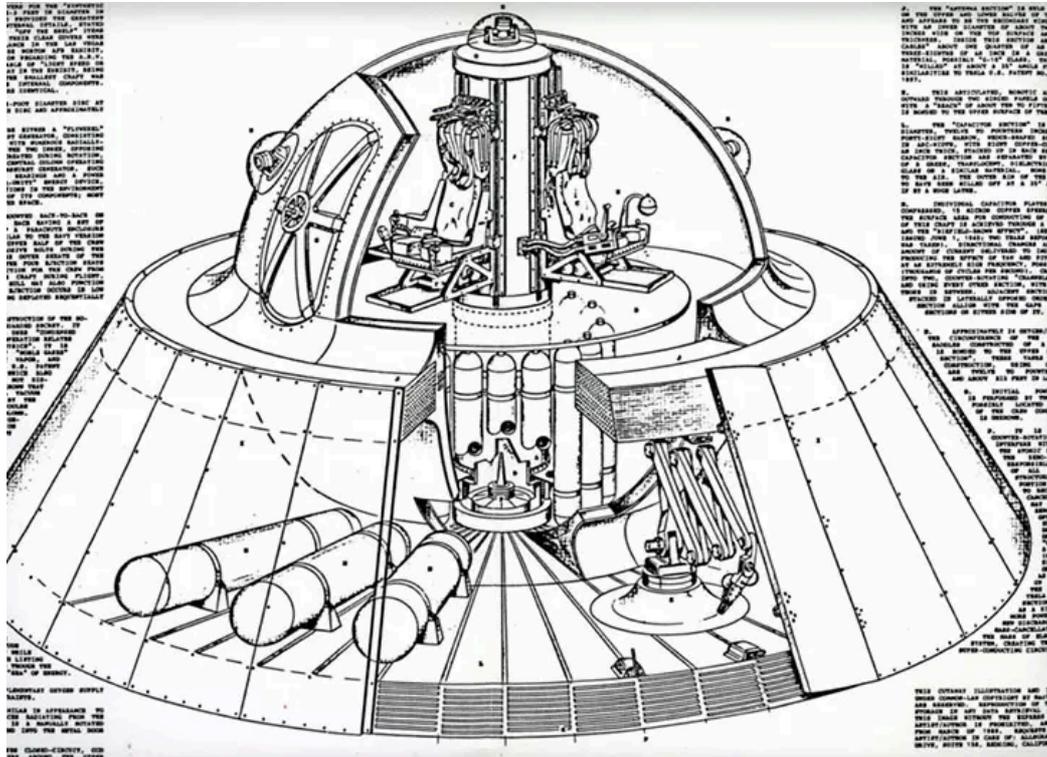


図 7.10 宇宙人・リプロダクション・ヴィークル ARV  
<https://www.coasttocoastam.com/pages/mccandlish-images-8-29-15/>

ある。その上に48区画がある。その2つに1つに酸素タンクがあり、計24個が置かれている。その48区画のそれぞれに8個の積み重なった0.5インチの厚さの銅板がある。コイルの円筒の周りにも酸素ポンベが24本ある。外面は35度の傾斜があった。外面上部の内部には金属輪のようなものがある。大中小の3機がすべて同じ形、相似形をしていた。最小のARVの下面は24フィート。その次の大きさのものは、60フィートあったのだ。

電源は24Vの自動車用バッテリー2個である。この電源から、巨大なテスラ・コイルのような原理で強烈な電磁場を生じさせる。

これで上面の金属輪を超高直流電圧にし、電磁推進力を得る。下面の48区画電圧をコントロールし、姿勢制御する。

これは、ニコラ・テスラが最初に考えた電気重力推進機<sup>\*30</sup>や、後に、ウィリアム・ラインが研究した電気重力推進機<sup>\*31</sup>や、さらに、我が国の早坂秀雄博士の本にあるバーソンの電気重力推進機と似ているのだ<sup>\*32</sup>。バーソンの電気重力推進機は、アダムスキーが金星人の宇宙船のシステムをバートンに教え、それを妨害工作のなさそうな我が国で特許を取得したものだ。だから、日本の特許庁に登録された正式な特許(昭和37-6555)である。要するに、一言で言えば、これはアダムスキー型の円盤の原理である。

それもそのはずで、戦後アメリカ人のアダムキーが出会った金星人オーソンの円盤、アダムスキー型円盤と戦前のナチスのトゥーレ協会が制作したハウニブ型円盤は全く同じ形をしていた。ラインによれば、その理由はこういう事情だった。フォン・ブラウン博士は若い頃ナチスの科学者だった。彼は戦前ドイツからアメリカにスパイとして派遣された。そして、全米くまなくニコラ・テスラの研究を探し回った。それをニューメキシコ州アズテックのあった独自の研究所で実験した。彼はそうやって得た電磁反重力装置の原理をドイ

---

\*30 ニコラ・テスラ著/井口和基 翻訳・解説「ニコラ・テスラの【完全技術】解説書/未来テクノロジーの設計図」(ヒカルランド、2015年)

\*31 William Lyne, *Occult Ether Physics: Tesla's hidden space propulsion and the conspiracy to conceal it*, 4th ed., (Creation Productions, NM, 2012年2月14日.) この拙訳は私のHPに掲載中。ウィリアム・ライン著/井口和基訳「オカルト・エーテル物理学/テスラの隠された空間推進システムとそれを葬った陰謀」, 2020年. <http://www.stannet.ne.jp/kazumoto/LyneOEP4.pdf>.

\*32 早坂秀雄 + 杉山敏樹著「宇宙第5の力 反重力はやはり存在した」(徳間書店, 1998年)

ツへ持ち帰った。それをノルウェーの洞窟内のナチス軍の地下基地で制作したのだった。だから、ニコラ・テスラの円盤とナチスのハウニブ型円盤と金星人オーソンのアダムスキー型円盤が似ていても不思議はないだ。この原理は、円盤 ARV として一番原始的なものである。これがマキャンドリッシュのフラックスライナーだったのだ。

戦後、アメリカ空軍基地の付近で、釣鐘型の浮遊物体の目撃があいついだ。我が国も矢追純一の UFO 特番にしばしば登場したものだ。その釣鐘型の ARV こそ、そのフラックスライナーの実験だった可能性が高いのだ。それゆえ、その ARV の周りをブラックヘリが護衛していたわけだ。これは原始的なものであるけれども、すでに人類は反重力装置を手に行っている決定的証拠なのだ。

金属物体に超高電圧をかけると、正電気の方向へ浮き上がる。ニコラ・テスラ自身は真空の宇宙空間でもそれが可能かどうかまでは分からなかった。テスラは空気中の酸素原子が交流電圧で固化するせいだと予想した。だから、昔はテスラの電磁推進力は空気の流体力学的効果だと考えられた。しかし、いまでは金属をエポキシ樹脂で閉じ込めることができる。だから、空気に接触させないことが可能だ。それでも浮き上がる。したがって、真空の性質を利用した方法であることがわかった。

そんなわけで、この現象の背後には、真空中のゼロ点エネルギー (Zero point energy, ZPE) が関与していると考えられるのだ。つまり、この空間には真空は存在しない。あらゆる場所に無限のエネルギーが潜んでいる。それを何らかの刺激を与えて取り出す仕組みである。これがフリーエネルギーの原理である。宇宙人の宇宙船はこの原理を見事に使ったものだったのだ。

## 7.8 デービッド・アデア博士のシンビオティック・エンジン

デービッド・アデア博士 (Dr. David Adair) をご存知だろうか？



図 7.11 デービッド・アデア博士 (Dr. David Adair)。

<https://www.pinterest.jp/pin/634655772475493405/>

21世紀になって、2009年頃キャメロット・プロジェクトにデービッド・アデア博士を名乗る科学者が突如現れた。<sup>\*33</sup> 彼はバリ

---

<sup>\*33</sup> YouTube で David Adair Reveals Light Speed & Symbiotic Engines

バリでエリア 5 1 で秘密研究を行っていた人物だった。彼は当時の米軍の最先端の ARV 研究開発がどのようなエンジンを開発中だったを暴露したのだ。

「ロケット・ボーイズ」という映画をご存知だろうか？

これは、ホーマー・ヒッカム・ジュニア原作のハリウッド映画だ。田舎町に生まれた少年がロケットに興味を持ち、大人になって NASA のロケット研究者に育つという映画だ。

デービッド・アデア博士は、このようなロケット天才少年の 1 人だった。この物理学者は幼少の頃からロケットに興味があった。小学生の頃に自作のロケットの設計図を描き始め、13歳で実際にロケットを作り始めた。17歳では彼はすでに10フィートのロケットを自作できた。そして、映画のように、全米のロケット協会や科学教育振興会が主催するロケットコンテストで入賞するほどの少年に育った。そうすると、アメリカの裏の科学者たちが、そのアデア少年に目をつけた。そして、今度一度研究所にロケットを見に来ないかと誘われた。そうやって NASA にスカウトされたという天才少年であった。むろん、裏 NASA だ。スタン・デヨ博士同様、正真正銘の天才である。

デービッド・アデア博士は大人になって、実際に米空軍の「エリア 5 1」で働くようになった。そこでは、「磁気融合エンジン (magnetic fusion engine)」を研究した。これは「磁気バブルを放出して推進力を得る」というロケットエンジンだ。これ自体大発明である。「磁気バブル」(磁気ソリトンとも言える)を外に打ち込みその反動で推進する。ニコラ・テスラの「デスレイ (殺人光線)」のようなもの

---

と打ち込めば見ることができる。

だろうか？ つまり、「プラズマ兵器」、「ビーム兵器」と同じような原理だ。これをロケットに応用したと考えられる。彼はそんなばりばりの裏 NASA の天才研究者であった。

そんな彼がエリア 51 で働いていたある日、ネバダのグルームレークの空軍基地に行くことになった。その地下基地のエレベーターで別のフロアに行った時、彼は衝撃的事実を目撃する。なんとそこには「シンビオティック・エンジン（生きているエンジン）」があったのだ。

ところで、「シンビオティック」とは、「人といっしょに生きている、共生している」というような意味の言葉だ。けれども、これは日本語には直しづらい言葉だ。だから、このまま使うことにしよう。

この「シンビオティック・エンジン」はスクールバスほどこの大きさがあつた。デービッド・アデア博士が作ったエンジンなど問題にもならないほどのパワーとスピードが出る。光速度で飛ぶことが出来る。見かけは何かの「合金」でできているようだった。彼は関係者からそこでエンジンに触ってもいいよと言われて触ってみたのだ。すると、その合金から何かフィールドのようなものが出てき手の周りを取り巻いた。それを介して、なんとそのエンジンは触って頭で考えるだけで操作できたのだ。そこには電子回路も回線も何もなく、直接脳からの刺激で動かすのだ。だから、まるでエンジンそのものが生きているようだった。触れば応答する。自分の心に反応する。こういうものが、「シンビオティック・エンジン」だ。。実際に、マクダネル-ダグラスというアメリカの謎のハイテク企業では「脳で直接操作するジェット機」を開発している。現在の F 22 戦闘機後の次世代戦闘機用である。

ところで、「ナビゲーター」という SF 映画をご存知だろうか？

アデア博士の見たものは、まさにこの SF 映画の空飛ぶ乗り物そっくりだ。おそらく、このハリウッド映画はアデア博士をモデルにしたものと考えられる。



図 7.12 シンビオティック・エンジン  
David Adair Reveals Light Speed & Symbiotic Engines 1 Of 5  
<https://www.youtube.com/watch?v=OmPKSOOr-ZCo>

アデア博士の暴露によれば、米軍内には「ロズウェル事件」の時の UFO エンジンよりはるかに巨大な乗り物がある。いったいだれがそれを作ったのか？ ハリウッドの SF、「インディペンデンス・デイ」の中にはかなり真実に近いものが描かれているのだ。だから、だれかが事実をリークしたに違いないのだ。彼の話の方には、ここでもすでに紹介した「UFO 暴露プロジェクト」の推進者のスティーブン・グリア博士のことが登場する。アデア博士がグリア博士に会った時、グリア博士が彼にまだ話すなと言いつつ放った。それでこれまで何も自分は公衆の前で話さなかったが、その後許可が下

りたのでこうして話すことにしたのだ。

面白いのは、1969年6月ケンブリッジ大学におけるアデア博士とスティーブン・ホーキング博士の出会いだ。彼は1971年にスティーブン・ホーキング博士と共同で「プラズマ・エンジン」の原理を解明した。このエンジンは光速度で推進できる。むろん、ホーキング博士の表のアカデミックな活動の中にはこういうものは一切抜け落ちてしている。これが英米人のやり方だ。

このように、この地球上の世界の「現実」は、我々日本人が思い描いている世界とは大きくかけ離れている。かつてアメリカのインディアンが思い描いていた世界観とそこへやってきた西洋人の思い描いた世界観がまったく異なっていた。それと同じように、この世界の現実はいま我々日本人を主人公にして動いているのではない。こういうことは普通の日本人は決して認めたくない現実だ。けれども、それが現実なのだ。我々日本人は、その昔のアメリカインディアンのようにあつてはならない。むろん、いうまでもなく、こういう超ハイテク研究を推進しているのが MJ12 に端を発した米軍産複合体である。これが、いまの言い方をすれば、イルミナティである。

ところで、ロシアには2012年の段階で2基のシンビオティック型 ARV が存在するという<sup>\*34</sup>。これらはロシア軍が宇宙人から指導を受けて独自に開発したものだ。テレパシーで運転するシンビオティック・エンジン搭載のものだ。ロシア人パイロットが ARV に乗る時は、まだ補助に宇宙人も一緒に乗り込む。さもないと、ロシア人パイロットは5分程度しか操縦できず、すぐ墜落するとい

---

<sup>\*34</sup> 保江邦夫著「伯家神道の祝之神事を授かった僕がなぜ/ハトホルの秘技 in ギザの大ピラミッド」(ヒカルランド、2013年)

うのだ。人類はまだその程度のマインドしかもっていない。ところで、このロシアにいる宇宙人は非常に長身でロシア人そっくりの金髪碧眼の西洋人型だ。だから、他国の人間が彼らを見てもロシア人にしか見えならしいのだ。

一説では、最近では中国にもグレイ型の宇宙人が円盤開発に協力しているという情報があることも付け加えておこう。残念ながら、我が国にはそういう貴重な宇宙人は来ていないようだ。人類の急速な進歩の裏には宇宙人の関与がある。こういう立場で人類史を見直してみる。これも一つの新しい視点になるかもしれないのだ。

## 7.9 ピート・ピーターソン博士の宇宙人宇宙船

ピート・ピーターソン博士を知っているだろうか？



図 7.13 ピート・ピーターソン博士。  
??? - 2019年7月12日。  
<http://dwcges.blog.fc2.com/blog-entry-40.html>

ピート・ピーターソン博士こそ、あのスピルバーグの未知との遭遇 (第三種接近遭遇) という映画で宇宙人の宇宙船に乗り込んだ米隊員たちの一人だった。この事件はアイゼンハワー大統領の実際の体験を基にしたものだ。アイゼンハワーはこれを公開しようとして失脚した。JFK はこれを公開しようとして軍産複合体から暗殺された。そういう重大事件だった。<sup>\*35</sup>

その間、ピート・ピーターソン博士はこの地球の喧騒を逃れて、大いなる宇宙を旅していたのだ。彼は宇宙人のナビゲートで宇宙を見て回り、いろいろ見聞を広げた。太陽系のさまざまな惑星。太陽系以外の惑星系。さらには、別の銀河団まで行って来たようだ。いわば、我が国の勝海舟やジョン万次郎のような人物だ。あるいは、もっと昔の浦島太郎のような男だ。

ピート・ピーターソン博士は、我々の知らないうちに任務を終えて地球へ無事帰還した。そして、彼は米軍に戻り、地球の若い世代の科学者たちに協力した。彼は地球に残された宇宙人と共同で宇宙人・テクノロジーのリバースエンジニアリングを指導したのだ。特に、宇宙人の宇宙船で破壊されたロズウェルの円盤の再構築を担当した。こうして、彼は地球上のあらゆるタイプの UFO の再構築を行った。彼は、そういうおよそ我が国では考えられないタイプの科学者だった。ピーターソンにはむろん話せることとまだ話せないことがあった。しかし、アメリカの矢追純一のようなデービッド・ウィルコックスの UFO 番組コズミック・ディスクロージャーで、いろいろ衝撃の事実を暴露したのだ。

---

<sup>\*35</sup> 昨年から今年にかけてのトランプ大統領再選阻止の力の強さを見れば良い。いかにこの力がものすごいものか解るだろう。

その話の中にアデアのいう、シンビオティック・エンジンを搭載した宇宙人の乗り物があった。これは人の意思や想念で操縦するものだ。操縦席には、その意志を伝達する時のための操縦桿のようなものがあった。前方にコントローラーのような両方の手形のくぼみがあったのだ。操縦者は自分の両手をそれぞれその手の形をしたくぼみへ乗せるのだ。そして、その状態で自分のマインドコントロールで円盤を操縦する。つまり、そういう状態で操縦者と円盤とでテレパシーで会話する。アメリカ人でこれができるものはほとんどいない。ロシアにも2機こういうタイプがあるようだが、むろんロシア人兵士もこれが5分しかもたないのだ。

ピーターソンの暴露で一番面白いのは、その操縦の手形は長い指が3本だったということだ。つまり、その円盤のパイロットである宇宙人の指は3本だった。とにかく、アメリカ人で我々日本人よりずっと大きな手を持つピーターソンの指より遥かに長い指だった。この3本の指を両手で使い、宇宙船を運行させるのだ。これを映画にパクったのがハリウッド SF 映画だ。このタイプの宇宙人は、アーノルド・シュワルツェネッガーのトータル・リコールやステューブ・スピルバーグ監督のインディージョーンズ、クリスタル・スカルの王国に出てくる。

このピート・ピーターソン博士自身もまたかなり特殊な経歴の持ち主だ。天才スタン・デヨ博士は、空軍アカデミーに入るべくして入った。同じように、ピート・ピーターソン博士は、幼少期からとてつもなくよく出来た天才児だった。だれもが一目置く子どもだった。それで、軍から特別の学校へ入るように勧められた。その段階で空軍により親の手から奪い取られた。

その学校は、ホワイトランチ（白い牧場）と呼ばれていた。ここ

には白人の天才児童が集められた。大半は必ずしも五体満足というわけではなかった。スティーヴン・ホーキングのような子どもたちだった。あるものはサバン症候群、あるものは精神や身体に問題があった。つまり、大半がハンディキャップス、精神障害児や身体障害児だったのだ。しかし彼らは知能がとてつもなく高い子どもたちだった。とにかくそうした突出した子どもたちが集められたのだ。ピート・ピーターソン博士はそういう子どもの一人と見られたのだ。

そこで彼はあらゆる学問の基礎を身につけ、成人になる頃には、だれも太刀打ちできない天才研究者に育てられたのだ。さもなくば、地球人より遥かに知能の高い宇宙人と意思疎通ができない。つまり、とてつもない知識と同時に、とてつもない適応力や洞察力や察知能力が要求されるのだ。IQ 300以上ないとだめなのだ。未知との遭遇で円盤に乗り込んだ兵隊たちはそういう人たちだった。さもなくば、せつかく隊員として乗り込んだのは良いが、何もつかめずに戻るだけに終わるからだ。

これまで数多くの一般人が宇宙人に拉致されて UFO に乗り込んだ。しかし、彼らから UFO についての正確な情報は得られない。我が国でも木村秋則さんが乗り込んだことがあった。木村さんは技術者だったので、まだ一般人の場合よりはるかにましだった。しかし、彼からですら十分な情報は得られなかった。米軍はそういうことを知っていたのだ。だから、それを避けるように少年を鍛え上げてから UFO に乗り込ませたのだ。

ピート・ピーターソン博士は、彼らの手の指が3本であること、これが決め手だと教えた。3本の指は数を数える場合、奇数の3を基にするだろう。だから、彼ら宇宙人の数学は3進法をベースにし

た数学だろうと推測した。彼は3進法の数学こそこの宇宙の数学だと考えたのだ。

この概念は、昔ニコラ・テスラが若い頃3, 6, 9の数字をベースにしたもので全てを考えることに没頭したという伝説を思いこさせる。彼はある時期、とにかく何でも3の倍数3, 6, 9で表した。彼はそれを発見し興奮したという伝説があるのだ。そして、彼は有名な法則を生み出した。これが通称「369の法則」と呼ばれるものだ。彼はこういう言葉を残した。

「369が宇宙と世界の秘密を解明する！」

ニコラ・テスラはこれらの数字にこの宇宙を解き明かすための鍵があると考えたのだ。

ニコラ・テスラの秘密の法則とピート・ピーターソン博士の宇宙人の数学とが絶妙に対応しているのだ。ここが実に興味深いところだ。おそらく、ここには何か我々の知らない本当の秘密が隠されているのではないか。

ピート・ピーターソン博士は何度もウィルコックスの番組に出て、こういった話を続けた。ところが、彼がこの3の話をし始めた頃、急に姿が見えなくなったのだ。しばらくすると、ウィルコックスに彼の急死の知らせがもたらされた。彼は自宅で不審死を遂げたのだ。これには自殺、病死、暗殺のさまざまの憶測が飛んだ。いずれにせよ、アイゼンハワーの宇宙人との会見の時代に宇宙人の宇宙船に乗った男はこうしてこの世を去ったのだ。

## 7.10 ダン・ブリッシュ博士のルッキンググラス

ダン・ブリッシュ博士の名前を聞いたことはあるだろうか？



図 7.14 ダン・ブリッシュ博士。1964年。

[https://projectcamelot.org/dan\\_burisch.html](https://projectcamelot.org/dan_burisch.html)

本名はダン・B・クレイン (Dr. Danny Benjamin Crain)。妻の名字であるブリッシュを名乗っているようだ。

彼は微生物学者である。彼は、エリア51のS-4でMJ12のプロジェクトの下で働いた、生粋のインサイダーである。しばらく前に彼はキャメロット・プロジェクトのインタビューでとてつもないことを暴露したのだ。

ダン・ブリッシュ博士のこのインタビュー<sup>\*36</sup>は、ビル・クーパー

---

<sup>\*36</sup> Stargate Secrets: Dan Burisch revisited:  
[https://projectcamelot.org/dan\\_burisch.html](https://projectcamelot.org/dan_burisch.html)

の主張の UFO 関連以外の宇宙人テクノロジーについて証明するものといえるのだ。

彼の所属した研究プロジェクトは未来予測であった。そのためのいくつかの未知のテクノロジーを米軍は1947年からロズウェルのグレイ宇宙人から得たのだ。彼が研究したものは主に次の3つだ。

- ・オリオンキューブ (Orion cube)
- ・ルッキンググラス (Looking glass)
- ・スターゲイト (Startgate)

オリオンキューブやルッキンググラスという装置は未来が見通せるというものだ。そんなものがすでに出来ているというのだ。要するに、オカルトや魔術などで使われて来た「水晶玉」や「アーク」などの背後にある科学技術をすでに米軍の一部は解明し、それらを実現した。

彼らの研究グループはそれを使って人類の未来を見た。彼らは、いくつかの「タイムライン (時間線=未来の予定の時間スケジュール)」を見ることが出来たのだ。いくつかの異なる未来が待っていた。「Tv83 (Time line variant 83)」というタイムラインは、最悪のスケジュールだった。どうやらこれが、我々が「ヨハネの黙示録」に一番近い、核戦争による人類終焉のスケジュールということだった。これはあまりに悲惨な未来で文書にできないらしい。

しかしながら、興味深いのは、そこに「変異 (Variant)」とあることだ。ある時刻で見た未来像というものは、その後の人々の願いや想念によって微妙に変化して行くものなのだ。それゆえ、100%

の確実な未来が存在するわけではなかった。1つの歴史が「運命」や「宿命」のように絶対に避けられないというものではないのだ。それゆえ、未来像は時々刻々と微妙に変化して行く。つまり、我々が良き未来を願って良きことを行えば、未来像もまた良い方へと変化する。逆に我々が地獄絵を思い描くと、未来像も地獄絵のようになる。そして、徐々にそのタイムラインに沿って現実が実現する。どうやらそういう事情だったのだ。そういう事がわかった。このように、米軍はまるで占い師の水晶玉のように常に未来像を得ることが出来るのだ。実に興味深いテクノロジーである。

ところで、この人の話からすれば、ビル・クーパーが宇宙人・UFOの暴露講演した時の内容が、ほとんどそのまま正しかったということになる。

なぜなら、クーパーは生前以下のようなことを主張し続けたからだ。

「共同利用していた基地内で技術交換が行われるようになった。宇宙人基地は、ユタ州、コロラド州、ニューメキシコ州とアリゾナ州のフォーコーナース (Four corners) にあるインディアン居住区の地下に建設された。1つはネバダにも建設された。ネバダのS-4基地は、エリア51の西側境界の南におよそ7マイル行ったところに位置する。その他のものはドリームランド (Dreamland, Area 51) にある。

すべての宇宙人基地は海軍省の完璧なコントロール下にある。そこで働く人々はすべて海軍からお金をもらっている人々である。基地建設はただちに始まりましたが、1957年になって巨額が利用できるようになるまでは、その発展は

遅々としたものだった。」(ウィリアム・クーパー講演パート4：米政府と宇宙人の密約)

「宇宙人研究の大きな発見とは、一般大衆は教えられるべきではない、というものだった。それは、このことが経済崩壊を引き起こし、宗教構造の崩壊を引き起こし、無政府状態を引き起こす国民的パニックになると信じられたからだ。こうして秘密が保持され続けました。この見解の分岐には、もし公衆に伝えられないのであれば、議会も伝えられることはない。こうして、プロジェクトと研究のための資金は政府の外部から来なくてはならないということだった。

何かはその場所に降りてきはじめた。宇宙人問題なしに、44年間に起こっていたことのどんなことにもつじつまを合わせることができない。もしすべての中心に宇宙人問題を置いた時のみ、あなたはそれらの1つ1つの答えのすべてを得ることができる。」(ウィリアム・クーパー講演パート7：「ジェーソンスカラー」と「研究グループ」)

「宇宙人たちがこの発見に出くわした時、彼らはそれは真実であると確証した。宇宙人たちは、異種混合(ハイブリダイゼーション)を通じて我々を生み出し、宗教(Religion)、悪魔主義(Satanism)、魔法(Witch craft)、魔術(Magic)やオカルト(Occult)を通じて人間を操作してきたのだと説明しました。さらに彼らは、宇宙人たちはタイムトラベルができ、その出来事が実際に起こるだろうと説明しました。アメリカ合衆国とソ連による、タイムトラベルを使用する宇宙人テクノロジーの後々の開発が、実際に何か悪いことが起りつ

つあると確証した。宇宙人たちは、実際のキリストの十字架のはりつけ (crucifixion) と彼らが主張した、1つのホログラムを見せた。これはフィルムに撮られた。」(ウィリアム・クーパー講演パート8：「ファティマの予言」と「3つの代替案」)

「我々の全歴史に渡り、宇宙人たちは、さまざまな秘密組織、宗教、魔術、魔法やオカルトを通して人間種族 (human race) を操作し支配してきた。外国関係諮問委員会 (CFR) や三極委員会 (TRC) は、宇宙人科学技術 (宇宙人工学) を完全に手中に収め、また国家の経済も完全に手中に収めた。アイゼンハワーは宇宙人問題の全体像を知る、最後の大統領だった。それに続いた大統領たちは、MJ 12や諜報機関が知って欲しいと思ったことの一部を知らされただけ。私を信じてください。それは真実ではなかったのだ。」(ウィリアム・クーパー講演パート12：ビルが言い残したこと)

今度はルッキンググラスの装置を見てみよう。この装置は図のような配置の装置である (上図)。中央にバレルと呼ばれる装置がある。それを3角形に取り巻く3本の柱がある。それぞれに発光する装置が頂上についている。バレルにはアルゴンガスが封入されている。それが高速で回転すると、その全面に奇妙な平面上の領域が出現する (下左図)。バレルの角度を変えると、その領域が平面から球へと変化する (下右図)。人はその領域の前に立つと不思議な感覚が得られる。つまり、占い師が憑依されて未来が見えるような感覚になるわけだ。その場所以外では何も感じない。

おそらく、この装置の一番の核心部分は「バレル (樽)」と呼ばれ

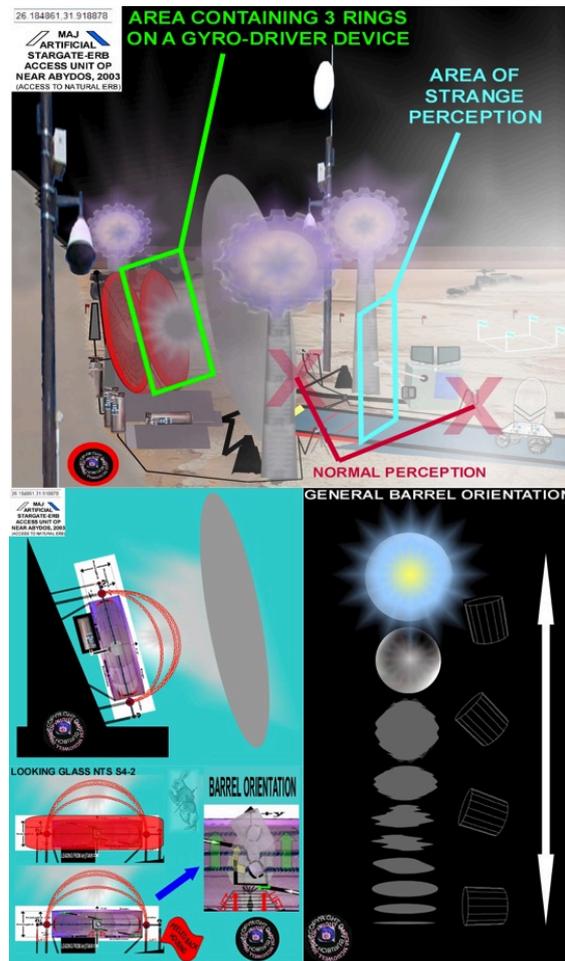


図 7.15 ルッキンググラス装置

[https://projectcamelot.org/dan\\_burisch.html](https://projectcamelot.org/dan_burisch.html)

る回転物体とその回転チェンバー内に封入されるアルゴンガスだろう。アルゴンのような希ガスを使う理由は不明だ。昔からヘリウムやアルゴンやネオンやクリプトンやキセノンやラドンなどの希ガスは非常に不思議な物質の代表格だ。希ガスが水中に入ると水で水和してクラスレートを作る。希ガスを吸うと麻酔作用を及ぼす。しかし、その理屈はいまだに未解明なのだ。

また、ジャン・ピエール・プチ博士のユミット星人の話<sup>\*37</sup>では、こうだ。細胞内には未発見のクリプトンが存在する。それがDNAと結合しているのだ。DNAに結合したクリプトン原子は宇宙と共振する。そのために、宇宙環境に合わせた生物進化が起こる。

一時表の科学者が真空中の光速度を超える通信を実現した。その場合に光速度を変えるのもアルゴンガスであった。希ガスには何か面白そうなことが眠っているようだ。

どうやらこの装置の中でバレルの部分が高速回転することで、まわりの時空を歪める。<sup>\*38</sup> その歪んだ時空の部分が、3つの赤いリングのすぐ外の「灰色の円」の部分なのだ。未来を見るためには、そのバレルの向きを変えて行く。すると、灰色の円形面が変化し、まさしく水晶玉のような領域へ姿を変える。

おそらく、これも推測の域を出ないが、その歪んだ時空の領域はかなり危険なのだ。それをシールドするための外側に3つのテスラ・コイルのようなタワーがあるのだろう。あるいは、その見ている未来世界へ突入するためのゲートを作るためのものだろう。そして青い四角の平面領域が、ドラエもんのどこでもドアのようなもので、そこに入ると異なる時空世界を体験できる。これが、「ス

---

<sup>\*37</sup> ジャン・ピエール・プチ 著/中島 弘二 (翻訳) 「宇宙人ユミットからの手紙—30年間 2000 通の秘密文書の謎を解明」(徳間書店, 1993); 「宇宙人ユミットからの手紙〈2〉人類介入へ精密なるプログラム」(徳間書店, 1994); 「宇宙人ユミットからの手紙〈3〉人類の脳に「種の絶滅コード」を発見」(徳間書店, 1998).

<sup>\*38</sup> これはルイス・アンダーソン博士の「ティプラータイムマシン」の研究でも登場するものである。ティプラータイムマシンだ。Tipler cylinder という。https://www.andersoninstitute.com/tipler-cylinder.html ; https://quasimoto.exblog.jp/12245531/

ターゲット」ことなのだ。この中に入るとどこに飛んで行くかわからない。だから、右側の何かロケットのようなカプセルに入る。そうやってパイロットの身を守るのだ。

米軍の科学技術はここまで進んでいたのだ。そして、ダン・ブリッシュ博士はヘンリー・ディーコン博士とともに、その驚くべき人類の未来を語ったのだ。

## 7.11 ヘンリー・ディーコン博士の2つのタイムライン

実は米軍の宇宙人・テクノロジーのリバース・エンジニアリングには後日談があるのだ。これには大きく分けて2つのストーリーがあった。

最初のもものは、1947年のロズウェル事件だ。やはり米国にとってこの事件がすべての始まりだった。米軍は一番最初にロズウェルに墜落したグレイ・宇宙人の生き残りを極端に恐れたのだ。そして、米軍は宇宙人を拷問して「お前は何者だ。どこから来た。何のために来たのか」と無理やり吐かせたのだ。それから無理やり米軍のために研究協力させたのだ。

これは映像としての真偽のほどは定かではないが、YouTubeの草創期からアップされた映像がある。一般に白人種は他の人種よりも恐怖心が強い。そのため、その宇宙人を捕らえて椅子に縛って拷問した。米軍やCIAが敵対者に対してよくやる方法だ。かつてニコラ・テスラの時代から数多くの電波研究者やフリーエネルギー研究者がこれをよくやられたのだ。

この時の宇宙人の自白には次のようなものだった。

我々地球人の未来は核戦争の危機があり非常に危うい。もし我々の時代に核戦争になれば、彼らの存在すら失われてしまう。それで、その状況をなんとかしたいと考えて、地球の未来からタイムマシンで訪れた。

つまり、米軍がロズウェルで発見したグレイ・宇宙人は宇宙から飛来したものではなく、我々の未来から来た地球人だったのだ。

この種族との研究から、徐々に最先端のさまざまな科学技術が伝授された。すでに説明したように、円盤 ARV の動力や仕組みはもちろんだ。それ以外にもタイムマシンやテレポーテーションのテクノロジーが得られたのだ。さらに、未来をみるテクノロジーが得られた。これは、欧米の魔女や占星術師や占い師や超能力者が大きな水晶玉 (ルッキンググラス) を使って未来を占うことを彷彿させる。それでこの未来を見るテクノロジーはルッキンググラス・テクノロジーと呼ばれるようになったのだ。

このルッキンググラスとテレポーテーションは類縁であることがわかってきた。空間移動と時間移動は親戚だったのだ。時空というように、時間を移動できれば、空間移動もできる。その逆もまた真なり。これはアインシュタイン理論がいい線は行っていたかもしれないが本質的には間違っていたことを示す。時空の変化はアインシュタイン理論で予測されたようなものではなかったのだ。つまり、テレポーテーションは空間だけでも時空だけでも同じようにして可能だった。空間だけの場合が普通のテレポーテーションであり、時間だけの場合がタイムマシンだ。だから両方ともにジャンプする。そこで、その起点や終点の装置の部分は、ジャンプルームと

呼ばれるようになった。物質や物体や人はその領域へ入ると、次の瞬間に消えて目的の場所へ移動する。

まさにテレビのスタートレックの世界だ。しかしそれもすでに米軍からアイデアがリークされたから描けたわけだ。その昔1967年のアメリカのテレビドラマのタイムトンネルがこれを描いたものだ。ドラエもんのどこでもドアもジャンプルームを描いたものである。

これらの研究を行った人物が、ボブ・ラザーのずっと後に出てきた男たちだった。ルッキング・グラスの研究者だったダン・ブリッシュ博士<sup>\*39</sup> <sup>\*40</sup>、ジャンプルームの研究者だったヘンリー・ディーコン博士<sup>\*41</sup>、そして、タイムマシンの研究者のデービッド・ルイス・アンダーソン博士だ。ブリッシュ博士とディーコン博士の話はそれぞれキャメロット・プロジェクトのインタビューに残された。ジェーソンの科学者から離脱したアンダーソン博士は、自分の独立したタイムマシン研究のアンダーソン研究所<sup>\*42</sup>を持っている。

米軍はその最先端の、我々日本人には未知のテクノロジーで、我々の地球の未来を見たのだ。すると、ロズウェルの拷問された宇宙人が言ったことが真実だった事がわかったのだ。さらにもっと驚くべき衝撃的事実がわかってきたのだ。

1947年前後までに米国に接触した宇宙人には、初期には大きく分けて、グレイ数種と欧米白人そっくりの宇宙人がいた。グレイ

---

<sup>\*39</sup> Stargate Secrets: Dan Burisch revisited: [https://projectcamelot.org/dan\\_burisch.html](https://projectcamelot.org/dan_burisch.html)

<sup>\*40</sup> Project Looking Glass: [https://projectcamelot.org/project\\_looking\\_glass.html](https://projectcamelot.org/project_looking_glass.html)

<sup>\*41</sup> An IntARView with 'Henry Deacon', a Livermore Physicist: [https://projectcamelot.org/livermore\\_physicist.html](https://projectcamelot.org/livermore_physicist.html)

<sup>\*42</sup> The Anderson Insitute: <https://www.andersoninstitute.com>

にはロズウェルに墜落したアジア系的な5本指のグレイと、比較的顔の堀の深い6本指のグレイがいた。後者はYouTubeの初期に出た宇宙人解剖のグレイである。それ以外のグレイは一般的に3本指である。そして、ホワイトハウスにきた長身で金髪碧眼の色白の北欧人型の宇宙人がいた。この種族はノルディックと呼ばれた。ノルディック型は、人類に友好的でスピリチュアルな種族だった。それ以外にアイゼンハワー大統領時代の1960年代に交換留学したロングノーズグレイがいた。

ところが、米軍内にあるMJ12の知識は徐々に増えていった。すると、アジア的なグレイ、西洋人的グレイ、ノルディック型が、それぞれ24000年後、45000年後、52000年後の未来の地球人だということがわかってしまったのだ。そこで、彼らにはそれぞれP24、P45、P52というような暗号名がつけられた。ところが、P24およびP45のグレイ種族とP52のノルディック種族は、2つの別々のタイムラインから来た未来人だったのだ\*<sup>43</sup>。

彼らは、このテクノロジーを1940年代のロズウェル事件の時に飛来した宇宙人（アジア人的グレイ・宇宙人）から学んだということを理解した。実は、この宇宙人はタイムライン1における24000年後の地球人（P24）だった。つまり、P24は地球の大異変から24000年地球に留まった種族の末裔だったのだ。

一方、現在、レプティリアンと呼ばれるものに近いグレイ・宇宙人種族がいる。この種族は、タイムライン1の地球史の45000年後の未来から来た地球人（P45）だった。この種族はストレス

---

\*<sup>43</sup> 「2012年にタイムラインの大変化があり得る」：ダン・ブリッシュ博士の未来予測: <https://quasimoto.exblog.jp/14531060/>

を受けると見た目がレプティリアンのように変化する。彼らは感情に乏しく冷酷で意地悪だ。この種族は、地球大異変の後、地下深部都市に移り住むようになった、イルミナティーの末裔だったのだ。そして、スピリチュアルなノルディックは、別のタイムライン2の54000年後の未来から来た地球人の末裔だったのだ。

ところで、これまでに地球を訪れている宇宙人の種類はどのくらいなのか？

これについてはすでにグリア博士の2001年9月1日の宇宙人・UFO 暴露プロジェクト\*44の時に答えられた。元米陸軍軍曹だったクリフォード・ストーン<sup>44</sup>の暴露によれば、1989年の時点で米軍は57種類の宇宙人を分類していたというのだ。だから、1947年前後でもビル・クーパーの話にあるように、かなりの種類が来ていたはずなのだ。

では、タイムライン1とタイムライン2とはどんなものなのか？

タイムライン1は、人類は天変地異により（あるいは、核戦争を起こし）、地球上で悲惨な状況が訪れるというものだ。だから、地上は住めなくなり、人類は地下へ移る。特に西洋人や米国人は大陸の地下基地に住む。アジア人は地上を逃げ惑う。放射能の影響をもらって、徐々に姿形が変わっていく。こうして、24000年後に地上に残ったアジア人はアジア人的目のグレイ種族へと変貌を遂げる。

一方、地下深部基地に逃げた白人種のイルミナティーは最初は問題なく生活をした。しかし結局彼らもまた徐々に地下でグレイ化し

---

\*44 The Disclosure Project UFO ディスクロージャー・プロジェクト（日本語字幕）：<https://www.youtube.com/watch?v=UzJnZqpFzN0>

てしまう。こうして西洋人は48000年後にグレイ種族へと変貌していく。こういうタイムラインだった。

タイムライン2は、人類は天変地異を受けるが（あるいは、核戦争を起こすが）、一部の地球人が宇宙へ逃れるというものだ。欧米人には科学技術の発達により、第3の選択として、地上を捨て、宇宙の人工衛星や月や火星のような別の惑星に移るものが現れる。すでにある程度そうになっている。そういう状態で、地球上で天変地異あるいは核戦争が起きる。この大艱難の間、地球上で悲惨な状況が訪れる。そこでまず欧米人の一部は月に居住するようになる。そして次に、彼らは火星へ行く。結局、地球上に残った人類は死滅し、宇宙へ散った離脱人類だけが生き残る。したがって、彼らの子孫が太陽系を中心に生活する。そのうち文明を更に発展させ、外宇宙のオリオンの惑星にまで進出し、そこに住むようになる。こうして、彼らのほとんどが西洋人だったため、欧米人型の宇宙人に変貌を遂げる。こういうタイムラインだった。

この種族は大変スピリチュアルな種族で、地球の平和的共生を望んでいる。これが、現在、金髪碧眼で長身で異常に大きな目を持つ、オリオンから来た宇宙人である。つまり、このノルディックはタイムライン2の地球史における、52000年後地球人西洋白人種(P52)の末裔なのだ。

では、さらに最近になって彼ら米軍が見た未来とは何か？

ヘンリー・ディーコンらの言葉で言えば、次のようなものだ。

2012年を境にある種の天変地異のようなことが頻繁に起こるようになる。それは、この地球と太陽系の銀河系の中における位置取りが変化することが原因で、サーバント・

ローブという微妙な位置を運航するようになる。そのため、銀河系の中でこれまでにない未知のエネルギーを受けようになり、人類にも地球にも大変化が起こるようになる。そして、地球の未来のタイムラインが、現在のタイムライン1からタイムライン2へ移行する。ルッキンググラスによる未来の透視では、その確率が81%で、現在のタイムライン1に留まる確率が19%である。すべては、2011、2012年頃の人類のあり方で変わる。

20世紀の後半に米軍が21世紀の未来を予測すると、そこには2つのタイムラインが見えた。21世紀の初め頃に分水嶺になる大きな出来事が起こり、そこを境にどちらかへ行くのだ。ところが、ブリッシュたちが何度予測しても、そのタイムラインの確率は、タイムライン1が実現する確率が19%、タイムライン2が実現する確率が81%になったというのだ。

それが21世紀を過ぎたら、タイムライン1が実現する確率が10%以下、タイムライン2が実現する確率が90%を超えたのだ。つまり、このままいくと、わずかな数の西洋人種だけが生き残り、ほとんどの人類が死滅する。これが、ダン・ブリッシュたちがルッキンググラスでみた我々地球人類の未来だった。

今現在、イルミナティーと呼ばれる人々のグループはこの事実を知っている。しかし、そんなことはおかまいなく、地球を支配するために、P52と協力関係にあるのだ。彼らは地球の大異変を地球人類の人口削減のために利用する。およそ地球人の2/3が絶滅する。彼らイルミナティーは自分たちで建設した地下都市に住むつもりでいる。

地球の大異変後に、このままタイムライン1の地球史を辿るなら、我々はアジア型グレイに変貌を遂げる。イルミナティーは地下に住む西洋人型グレイ・レプティリアンに変貌する。一方、タイムライン2では、地球は住む場所ではなくなり、最初に月に移住した西洋白人種だけが生き残る。その後、彼らはオリオン種族に変貌する。この実に奇妙だが恐るべき未来を彼らはルッキンググラス・テクノロジーを使って垣間見たのだ。

しかしながら、令和3年(2021年)の今の現実を見る限りにおいて、この未来予測があながち間違っていない。そのように見えるのは私だけだろうか？ 確実にタイムライン2の実現に近づいているように見えるのではないか？ COVID-19を使い、人々はロックダウンの状況にある。その間、超大企業はますます超大化する。世界第二位のテスラ・モーターズのイーロン・マスクは、強行に火星行きプロジェクトを計画中だ。新型コロナ感染を理由にアジア人は西洋諸国から徐々に締め出されつつある。不気味な世界が待っているようにしか見えないのだ。タイムライン2の未来だ。

## 7.12 我が国より100年進んだ米軍の科学・技術

19世紀の末期から20世紀前半を経て、ニコラ・テスラの時代は、放電現象を扱う、強磁場、高電圧、高周波の強電技術が誕生した。電波技術、真空管技術、放電やネオンのイルミネーション技術、高圧高周波技術、三相交流モーターや多相交流モーター、2万ボルトの高電圧ケーブルによる電力輸送、こういったものが主流で花形

だった。水力発電はその最高水準のハイテク産業だった。第二次世界大戦前までは、それが続いた。

しかし、戦後の科学技術は1947年のロズウェル事件を契機に、リバーズ・エンジニアリングやアイデアの源泉として宇宙人の科学技術を模倣する形で出発した。その結果、何一つ問題なかった真空管産業から半導体産業に代表される弱電技術へといきなり移行したのだ。

この変化がどれほど想像しがたいものだったか？

戦後しばらくしてIBMの基礎研やATTのベル研からシリコンやゲルマニウムの半導体が生まれた。それが基盤技術となり、トランジスターが発明された。さらにIC、LSI、CPU(中央演算装置)が開発された。その技術からパーソナル・コンピュータ(通称、パソコン)が登場した。これができると、開発スピードは更に早まった。すべてがオフィスオートメーション(AO)化され、デジタル制御の時代に入った。さらにリチウムイオン電池、携帯電話が生まれた。それがインターネット網やデジタル・テクノロジーの進歩とともに、スマート・フォン(スマホ)が生まれた。こうして、今現在の形になった。そしてさらに戦前から研究テーマであったAI(人工知能)が開発の真っ最中だ。そしていまでは1平方ミリの面積の半導体の中にパソコン64台を楽々埋め込むことができるのだ。これが今現在の我々の置かれた状況だ。

これらはすでにニコラ・テスラが世界電信システム、無線送電、世界システムとして予想したものだった。しかしながら、その当時のエジソンの大発明に馴染んだ人々にはどれほど想像することが難しかっただろうか？

ここに1910年のエジソンやテスラの時代に想像された21世

紀の絵がある。彼らは21世紀になっても真空管やコイルが使われ



図 7.16 1910年の欧米人が想像した  
21世紀のスクリーン電話。

<https://tabi-labo.com/214172/19-future>

と思っていたのだ。

第一章の最後に「いま我々のいる時代から100年後の世界とはどんなものだろうか？」という疑問を提起した。どうだろうか？少しはイメージがつかめてきたのではないだろうか？

はたして100年後の未来像とはどんなものだろうか？

つまり、我々日本人が100年後に見る世界とは、少なくともいまアメリカが現実実現した世界である。なぜなら、我が国の科学技術は戦後、アメリカから100年遅れてしまったからだ。アメリカの科学技術は我が国より100年先を行っている。だから、我々の100年後は彼らの今である。

我が国だって、戦前は当時の最先端の名機、ゼロ戦や紫電改を作った。ジェット爆撃機の桜花だって作った。潜水艦ならゼロ戦内部保有できた伊400、伊401シリーズを作った。軍艦なら世界

最大の戦艦大和、戦艦武蔵を作った。しかし、戦後はすべてアメリカに制限され、何も出来なかった。だから、そのまま戦前レベルで凍死したのだ。

そんなわけで、我が国の100年後は、1977年にスタン・デヨ博士が暴露した装置は必須だろう。

- A. 反重力装置
- B. 空飛ぶ円盤技術
- C. 光速度超えて運動する技術
- D. 無線電力輸送技術
- E. 電磁プラズマやバイオプラズマを使い皮膚や組織の再生回復ができる技術や新型の薬
- F. プラズマ衝撃波兵器技術
- G. 極低周波の電磁波で人の心をコントロールする技術

太平洋戦争の敗戦国扱いになった我が国には、戦後は独自の軍隊がない。自衛隊しかない。我が国は米軍のように自由に兵器技術は開発できない。したがって、FやGは不可能だ。しかし、A-Eまでなら実現できる。それが現実になった社会になることは可能だ。しかしながら、Hの場合は兵器使用でなければ、アデア博士が研究したようなプラズマ衝撃波を利用したエンジンであれば問題ない。同様に、Gの場合も電磁波で人心の制御なら問題があるとしても、自分の脳波を増強して機械や戦闘機や乗り物を制御するのであれば、問題ないに違いない。

反重力装置ができると、重力を制御できるからフリーエネルギー発電が可能になる。空飛ぶ乗り物を作ることができる。高速度を超

える技術は、時間旅行を可能にする。つまり、タイムマシンの技術だ。全く新しい新薬、電磁的に病気を治す技術。こういうものができれば、昨今話題になってきたメドベッド (医療ベッド) の技術が可能になるだろう。

今から100年後の未来とはどんな世界か？

この問いに対する答えは、かつて夢物語でSFネタにしか見えなかったことが普通に実現する世界なのだ。かつて昭和の人たちが21世紀の未来はこうなると思った世界。しかし、それが100年遅れたわけだ。

なぜ？

これについては、また後に改めて見ていこう。